

小田原史談

第2号

発行所 小田原史談会
小田原市幸一丁目
郷土文化館

現代 小田原大秘録 (一)

石井富之助

はしがき

図書館所蔵の「片岡文書」の中に「小田原大秘録」という本がある。片岡文書の寄贈者であり、この本の書写をした片岡永左衛門氏によれば、小田原大秘録はもと十二巻であったが、一巻から四巻まではすでに失われ、残本は小田原の狂歌師紀軽人、すなわち大原屋(藤井)甚兵衛の家に伝っている。編者並びに年代は不明だが、小田原藩土某の見聞記で、郷土史の参考になるので書き写したとある。内容は小田原藩の武道家の逸話、事蹟で読んでみるとなかなか面白い。原文のままでは固苦しく、読みにくいので、現代語になおして連載することとした。

巻四

金成与九郎亡滅の事 酒井伴六射術の事

著者は人を愛し、名將の御家中の金成与九郎はこれほどは芸人が集ると言われていた。こゝ頃神谷与右衛門といふ無文流の劍術師がいたがと常々考えていた。ある時

父にこの事を話したところ父の彌兵衛は大いに怒り「その方は何と心得ているのか。かりそめにも殿のお抱えになった神谷与右衛門である。彼も随分達人であるから打ち捨てておくがよい」としきりに押しとどめた。しかしどうしても与九郎が聞き入れぬ有様に、金成彌兵衛は自身神谷の家へ出向き、御門弟になりたいと頼んでいる。神谷ははなはだ迷惑していろいろ辞退したが、金成がたつてと頼むので、是非なく師弟の約を結び、金成彌兵衛と立合うことになった。

ある日のことである。与九郎は松下阿〇、片切八郎太夫と三人連れ立って目黒不動へ参詣した。行人坂に差しかけた時、向うから編笠をかぶり話をうたつてくる者がある。与九郎はそれを見ると「あの者は只者ではないが、あれを斬って見せよう。二人は稲むらのかけで見物せられよ」といった。二人は「平によし給え」としきりにとめたが、どうしても聞き入れないの仕方なく傍にかくれて見物することとした。

与九郎は向うから来る男の顔につばきをはきかけた彼が「悪いことをする人もあるものだ」と言いなから行きすぎるのを、後から突きめしめて無理無体に喧嘩をしかけて、抜き合せて火花を散して戦ったが、なかなか勝負がつかなかった。そのうち与九郎は斬り立てられ田の端に追いつめられ

て、まことに危うく今にも斬られそうに見えたので、二人は稲むらのかけから助太刀に出た。彼は「連れがあるな」とふり返ったとたん、二つになつて田の中へころげ込み息が絶えた。まことに与九郎は危うい淵をのがれたものであった。不動へ参詣しての帰りに与九郎は「自分が田の端へ追詰められ危うく見せたのは一つ計略である。その時は二人が見かねて出てくるのは必定。彼は驚いて逃るか、ふり返るにちがいない。そのすきがあることを前から知っていたので、上手と知りながら立合ったのだ。これ数年の功、辻斬りは得意とするところだ。昔岸柳が武蔵に斬られたのもこのうら形であろう」と言った。(つづく)

小田原史談会主催 二宮尊徳研究会開催

九月十九日二十日の両日

小田原史談会では左記により第一回練成会として「二宮尊徳先生研究」を開催することが決定した。定員は六十名を以て、切ることになっているので、早目に申込んで欲しいと係では云っている。

▽開催要領

日時 九月十九日午後一時半より一泊

会場 小田原市栢山「尊徳記念館」

会費 四百円(一泊三食付並に茶菓その他雑費)

申込所 小田原市郷土文化館

申込メ切 九月十日 但し定員に達した場合は、いつでもメ切ることになります。

▽行事内容

九月十九日(火) 午後一時半現地集合。二時半遣跡めぐり。四時~五時、尊徳先生生家にて「茶会」。五時夕食。七時~九時半中野敬次郎氏講演と座談会。十時就寝

九月廿日(水) 午前七時起床。八時朝食。十時~十一時、善栄寺に於て墓前祭。正午生家にて昼食。午後一時~二時半報徳祭祭典興見学、のち自由解散。

事火木ノ松

永塚雷電社

内田武雄

今年火事がたいへん多かつたようですがその中でも最もめづらしかった火事を皆様に御招会いたしました。二月廿六日午後三時ごろ有線電話のお知らせ放送で、ただ今永塚の雷電神社の松の木がもえていますとの知らせにおどろいて外にとび出して見るとなるほど十七メートルほどの高い松の木が三メートルほどかなほのおが三メートルほどふき出している。まるで大蛇がまっかな火えんをふいているようである。さあ大へん何台かの消防自動車が出来ても十七メートルも高い松の木が三メートルも高から火をふいているので、なんとしても火が消えるわけがない。そこで村人一同そ

うだんの上この松ノ木を切り倒して火事は一応おさまったが、どうしてこの大木がとげん燃え出したのかわからぬ。まさか氏神様が、かみなり神社でもかみなり様のおちるようなお天気でもないのに、そのうちだれかが子供が松の根方で火をもしたとかこのさわぎに子供が二、三人どこかへ行って行ったとか、うわさはあつたがあきらかに根方には火をもしたらしいはいのあとすらもみつからなかつた。けっきょく原因は氏神のかみなり様におねがひしてすべてはすんだようです。

こうなると、氏神様もたしかにありがたい、だれにも罪をきせつに事をすまして下さつたようです。このありがたい雷電神社を氏神として祀つた動機は、相模風土記によると寿永二年七月頼朝卿当国長基郷を豆州走湯山の常行堂に寄附あり当村のことなり、走湯山文書奉寄走湯山常行堂、相模國長塚郷一所事。右件郷木自雖為寺領。殊為丁擲動行。可令奉密御也。然則堂象等令存其旨。朝暮勤行。可令奉祈源家安穩御息災延命。增長福壽御願成就之由也。仍奉寄如件。治承七年七月廿五日頼朝花押あり宛に座主と記す。座主河野法橋と記してあり。

当郷走湯山領であつたころ村民ある時助郷に行き走湯山々にて大かみなりにあひ、走湯山々中の氏神様であつた雷電社に逃げ込みてそのきなんをまぬかれた為にこの雷電社を勧請して永塚部落の氏神として祀つたそうです、今の御神体石象は走湯山よりもちかへつたものと言われておりますこの度はかみなりでなく村人のきなんをすくつて下さつたのですから、わしらの氏神様はたしかにあらたかなものですと村人はよろこんでいます。

今度の火災で切りたおされた松の木は長さ十七メートルまわり三メートルほどで皮はだが十五センチぐらゐで、大きなこんくり土かんと思はばまぢがいが、なに子供なら三人ぐらゐに上から下まで通れるほどのうづつです。部落ではだれか物ずきの人があつたらせひ買つてほしいとの事です。

今日の思い出はつきないが、この催しの一番の収穫は鎌倉五山を一日で全部巡つたという事だろ。建長寺、円覚寺位は誰でも足をはこぶが、浄智、寿福、浄妙となると行く人もまれになつた。それだけにこうした古寺は本堂の鎌倉の歴史と伝統を思ふことができた。杉と竹林が影を落す浄智寺の参道は国道沿いとは思

第三回史跡めぐり(七月六日) 鎌倉の古寺を探ねて

岸達志

我家で我々を歓待してくれ

た。こんな風に五山をはじめとする史蹟古寺をめぐってひし／＼と感ずるのは鎌倉の質朴さという事である。私達は松下禅尼の切ばりで当時を思い出すが、たしかに鎌倉の文化はそれで代弁されていると思う。元来平家の模した王朝文化とは違い、そうかといつてすぐ後に出た室町文化の渋いがしかし華々しい風情とも違う。禅の質朴剛健といつても足利氏のようなシイクな禅ではない。要するに田舎びた武士の気風そのままの文化である。円覚寺の舍利殿に見るような、なか／＼としゃべっているが芽ぶきの屋根を平気のうけているような気分である。無理してみやこの真似する必要なとするやう方は、単なる節儉等というものでなく、充分なる実力を背景とする鎌倉武士の気概と自然のあらわれであつたろう。鎌倉は史都の名の通り美しい山の中に史蹟や古社寺が訪ねる人も少なく埋もれている。史談会の行事として今後その谷津谷津を訪問したいと

長興山と鉄牛禪師

藪 田 長 平

箱根行のバス又は電車に乗ると、小田原を出て、間もなく右手に鬱蒼たる古松のそびえたつ山麓を眺めるであろう。この山が長興山で、こゝに小田原城主稲葉丹後守正勝が寛永九年に創設したる紹太寺があり、黄壁宗の名僧禪師を請して開山としたところである。惜しいかな寺はその後祝融にかゝり、結構を極めたが伽藍悉く灰燼に帰し、いまは正面昇り口坂下の右手に寺名を継ぐさゝやかな庵があり、文閑に隠元禪師筆の「紹太寺」の大きな額がかゝって、往昔の豪華さを物語っている。

鉄牛の普山は、稲葉正勝の子美濃守正則が先妣追福のため、一寺を城東飯泉村に起すについて招請したことにはじまり、寛永七年に寺を入生田石牛山（又は臥牛山のちの長興山）に移し、寛永九年竣工の歳にいよいよ鉄牛を開山としたのである。当時鉄牛は四十二歳であった。鉄牛のその関係で元祿十三年八月二十日七十

三歳で下総国香取郡福壽寺で示寂するまで、稲葉正勝の子正則（寛永十一年小田原城主となる）の世話になつてゐる。

いま焼け残っている長興山の額は、鉄牛が長崎に赴き、崇福寺に来朝の隠元禪師に謁し、その弟子木庵に参じて侍者となつた関係で寛永九年紹太寺造営の業を終えた時、禪師の染筆を得たもので、この歳に木庵が紹太寺に来て鐘銘を作つてゐる。

鉄牛は稲葉正勝の懇請に応じて、長興山の開山に心を傾けて寛永九年に紹太寺を完成した。勿論稲葉氏の力が加わつて豪華な寺が出来あがり、こゝを稲葉氏の永代菩提寺として正勝の夫人をまつり、山号を長興山と改めた。この山号は正勝夫人の戒名「長興院殿心伝妙安大姉」から採つたものであり、紹太寺の寺名は、正勝の法号「養源寺古隠紹太居士」からとつたものである。

正勝の死は寛永十一年で

紹太子開基後であるからおそらく正勝の妻長興院（寛永三年十二月二十日死）追福をかね、実母春日局の髪爪を得て五輪塔にまつたものと思われる。春日局は世人の知るごとく、三代將軍家光の乳母で大奥を統べ飛ぶ鳥を落す権力があつたので、稲葉氏は春日局の協力を得て、菩提寺を造営したのではなかないかと思つたのである。

寺記によると、箱根の湖水の底から得た靈木を基として工を起したことが記されているが、往昔の湖の湖底から埋木が沢山堀り出されたことから見て事実である。

あろう。鉄牛の寿塔は二尺四方、丈八尺のもので、正面「開山鉄下牛老和尚寿塔」裏面「貞享丁卯七月二十日局をばはじめ七基の古塔は超格造立」とある。こゝには鉄牛六十歳の髪爪が埋められたのではなからうか。この寿塔は関東大震災の際に倒れて寿塔の中から書きつけが現われたが、雨にうたれて紙面を読み得なかつたといふ。

小田原城主稲葉は丹波守正勝より正則、正道と相継ぎ十萬二千石を領したが、正道は四代將軍家綱の老中に出世し、貞享二年十二月十一日越後国高田城主に移

封となり、大久保氏の代となつて、墓所はいつとはなくさびれ、紹太寺焼失後は訪う人もなく荒廢して、春日局をはじめ七基の古塔は吾むして、雑草に蔽い被され、浮世の変転にたゞ無情を感じて一抹の涙なきを得ないのである。私は数年前墓前に於て左の駄作をものして哀悼の意を表したのであつた。

長興山麓寄禪林
無復当年梵誦音
浮世榮華如一夢
墳塋埋草暗蛩吟

因に百科辞典に鉄牛のことをこう記されておる。
黄葉宗の僧。岩見の人。

小田原周辺の遺跡分布とその概要

——縄文式文化時代について——

橋 口 尚 武

小田原周辺の縄文彌生古墳各文化時代の遺跡は文献の上では数多く知られてゐるにもかゝらず、学術的報告書は少なく、又正確な遺跡の分布図も作成されてゐないのが現状である。私は二ヶ年計画で小田原周辺の遺跡分布作成に着手し、

昨年箱根外輪山麓を中心として踏査を重ねた。発表するには時期早計かとも思われるが、一応昨年の成果をまとめ、今後の御指導をお願いしたい。直彌生古墳時代については後でまとめることとし、今回は縄文式文化時代の概要を記す。

一、縄文式文化時代について

小田原周辺にいつ頃から我々の祖先が生活し始めたかという問題は、歴史を研究する者に限らず、広く一般の人にも興味ある問題だと思われる。昭和二十五年群馬県岩宿遺跡に於いて洪積世上部のいわゆる関東ローム層中より石器が発見されてから、このような事実が各所で知られるようになり縄文式文化時代以前に土

器を知らない人々が生活してゐることが判明し、考古学上これを無土器文化時代と呼んでいる。この時代の人々は黒燐石、頁岩、瑪瑙、水晶、安山岩等の割合硬い原石で石器を製作してゐた。黒燐石、安山岩の原石産地を控えた当地方にも遺跡存在の可能性がないこともないがその確証はまだつかめてゐない。

(つづく)

俗姓藤原氏、名は道機、白牧子と号した。出家して諸国を遍歴し、明暦元年（一六五五）長崎崇福寺の隠元に師事した。万治二年（一六五九）江戸に来て湯島の麟祥院に住し、次で木庵から印可を受けた。後紹太寺、弘福寺等を開創し、更に延宝六年（一六七八）下総樟沼の開墾に尽力し、十二年を費して新田八万石を得た。元祿十三年（一七〇〇）寂、年七十二、大慈普心国師を追諡された（著書七会語録・自收摘稿等）

山伏塚

下曾我支部

穂坂辰己

春まだ浅い二月の頃、花のさがけを跨って咲く曾我の梅は其の数五万、霞の様に覆都として清い香りをはなつて行楽の人の心を清らかにする。其の頃になる足柄山と遠影に太陽光線を重点に於いて旅館に泊つて時間的に画筆を振っている他方素人画家・豆画家も大いに張り切って画いていると思ふと観梅の客が男女を問わずパチ／＼とフィルムに納めて楽しんでゐる。

天正十八年豊臣・徳川の諸將が小田原城を攻めんとした時秀吉はまっ先きに牙營を置かんと秘かに下見分を石垣山に登った時、小田原城遙か後方に當つて霞の如く貼綴したのを見て梅花の綻びと聞き、其の遠望の美なるを賞賛したという。

吾が曾我の里は曾我兄弟の発生地としてあまりにも有名であるが、其の他に誇りとして紹介したいのが沢山である。其れは先史原史時の

石器時代、所謂縄文彌生の文化時代に於いて山を背に温度の高いのを利用して先住民が住んでいたというものを立証する物が沢山ある即ち曾我谷津の一带、上曾我竹ノ内部落等から矢の根石、石斧・石棒・石臼、神社の御神体だといふ男女の性器等の石器や縄文式文化時代の土器が沢山発見される。現に私も十数年前小学校校へ参考品として彌生式の石器の完全なものと数種の石器を寄贈したが現在には彌生式だけは保管してあるが他は誰かの愛好者は持ち去つたであらう。今は無い。

支那の支那城前寺或は文士の尾崎一雄先生の宅には沢山保管してあるのを見ても明らかである。其の他曾我には横穴縦穴だと思ふ古墳の跡があつて、今尙存している。其の穴へ行襲流水風の赴くまゝに流れ来た傑僧風外禪人が寛永四、五年住んだ上曾我竹の内、由緒の横穴、或は元祿の頃

曾我村山麓の穴に住んだ奇僧澄禪聖人、曾我原に住んだ徳本聖人等の遺跡があるが、浅学非才の吾々には其の奥誼まで調べる力がない。是等は曾我兄弟には関係のないが、今一つ関係のないものを紹介して見た。是れが此の項の主題である。「山伏塚」これは相模風土記に記載してあつて、描写であるが、豊臣・徳川の諸將が小田原攻の際城中の密使が斬られた所、即ち天正十八年五月小田原城を抜け出した密使二人が山伏姿をして大山街道の曾我山、六本松峠を目標に駒をいそがせていた。中村多聞亮が六本松越へを守備されていた二人の山伏は西光院玉滝坊の輩下で真田城の北条安房守の許へ連絡の密使であつた多聞の従士市川外記の為に捕へられて其の首をはねられた。中村多聞亮はこれを憐れんで其の翌年墓を建てた本覚院自性浄心居士遷位、右に天正十九年辛卯祀左方に五月上旬日寂とあつて、一米突の高さの自然石に刻まれた此墓が曾我支所の裏の隻になる松の大樹の下に眠つている。中村多聞は曾我原の旧家中村氏であ

る小田原攻の前は曾我姓であつて過去帳には祖先は遠く平安時代であつて建久の頃曾我兄弟の養父太郎祐信の生家である様に記載してある。其の曾我多聞が秀吉に組した好意に寄り秀吉の生地の中村を姓とし多聞に賜はり其の戦後戦功に依り此附近十五ヶ村の大庄家たのべき制札を秀吉から贈られたといふが、此制札は大震災の時水にしたり破損したといふが、今尙中村家に家宝として保管してある。

従士市川外記は曾我谷津の浪士であつて法輪寺に眠る。密使西光院玉滝の輩下は上曾我の久保田に西光院といふのがあつたらしいが調査中である。いづれにし

でも吾が曾我の里は史談に花を咲かせる所であつて吾々支部員も一丸となつて相勤め、又史談愛好者の力を借りたいと思つている。尙又今回小田原市教育委員会に曾我山中腹にある松林中の高さ二米突余の曾我太郎祐信宝篋印塔を重要文化財に指定された事を誇りとす

久野の歴史 刊行さる

遅刊のおわび

久野史談会では同公民館の委嘱で「久野の歴史」第一集をこのほど上梓した。内容は上古時代から室町時代までの概説で、本文三十六頁。上古時代の執筆は

創刊号を三月十五日附で発行したまゝ、第二号を今日まで延引いたしましたことを先ず以てお詫び申し上げます。

遅刊に至りました原因は全て編集部員のいろ／＼の手違いから生じたことと今後はこのような不始末の起りませぬよう全員誠意を以て努力を致し不名誉をばん回致します事故、会員諸兄に何とぞ寛恕御諒承の上、旧に倍して御支撥下さいますことを伏してお願い申し上げます。

三号は十月十五日に発行致します。

小田原史談会 編集部 一同

同史談会専門委員立木望隆
寺院関係史は同、岸達志の両氏である。久野公民館発行。非売品。

史談会
文化祭参加行事
▽八月二十九日理事會を開き文化祭には展覧會の他謡曲と琵琶の會が参加し決定した。次号に詳報するが担当は落合信一、清水專吉郎岩田忠介、佐々木金治の各理事。

展覧會は「江戸時代商家展」仮称、で担当は東海俊美、勝野憲治の理事。

▽機関紙編集委員は、三号までは立木望隆理事。以下は浅見靈風、養田長平（交渉中）の各理事が担当。運営面には井上英一、落合信一両副会長の他佐々木金治額田喜代春理事が担当すること等が決定した。

第二号

昭和三六年九月十五日発行
(毎月一回発行)
会費 一ケ年三百六十円
発行 小田原史談会
編集人 機関紙発行委員会
発行所 小田原市幸一丁目 郷土文化館内
小田原史談会